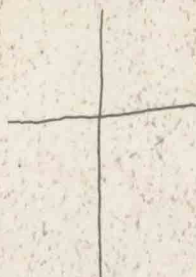


宣告 下卷

加賀乙彦





せん 告 下巻
宣 告

発行 1979年2月20日

13刷 1979年10月15日

著者 加賀乙彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71／振替東京 4-808

電話(03)266-5111業務部／(03)266-5411編集部

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

定価 1500円

© 1979, Otohiko Kaga, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

宣告
下卷
目次

第七章	第六章	第五章	第四章
裸の者	光る花	死者の船	涙の革袋
282	226	96	7

(3・4・5)

装
幀
司
修

宣

告

下卷

第四章 涙の革袋

3

誰かに呼び起されたようで、他家雄は目を覚ました。朝という気がしたがすぐ夕方だとわかった。夕食後また寝込んでいたのだ。ラジオがやかましく鳴っている。

あなたを愛するわたし、
目で撫でちゃうわたし、
あなたは、熱く、熱く、熱く、
あなたは、硬く、硬く、硬く……

鼻にシューシュー抜け、音程がすこしはずれて、古レコードのような少女歌手の声だ。

彼は立ってスイッチを切った。少女歌手の声は小さくなったかわりに、あたり一帯の房にひろがった。いまや舎房

全体が歌い続けている。熱く、熱く、熱く、硬く、硬く、硬く。五時の日夕点検がおわったあと、五時十五分から仮就寝となり、横臥することが許され、九時の本就寝までラジオが聞ける。大体が野球か歌謡曲で、ニュースはカットされ、その間所長訓示とか管理部長の修養談とかが流される。熱く、熱く、熱く、硬く、硬く、硬く。部屋の中に暖房でも入ったように暖かい。窓の把手に手をかけると、こんどは拍子抜けしたほど具合よく開き、ふやけた夜気が流れこんできた。それは完全な冬景色を示す中庭の雪と調和しない。肺の末端まで春めいた空気を吸いこみながら彼は何か不可解な思いにとらわれた。

安藤の不吉な笑聲がした。唐沢と話している。安藤は点検の直前、向い側の房から唐沢の隣に転房させられて来た。

この安藤の転房は確定囚仲間に驚きと不安を覚えさせた。

というのは、今迄確定囚は、向い側に砂田と安藤、他の舎房に唐沢と分散させられていたのが、入病した大田長助と特殊房に移された砂田市松を除いた全員が、こちら側に並ぶことになり、何だか余りに整理されすぎていて、来るべき大量処刑の前触れのように思われたからである。安藤の笑声が不吉に聞えてくるわけだ。

「おい、坊っちゃん、なにがおかしいんだ」と他家雄は苛立つて呶鳴った。

「あ、楠本さん、聞いてたんだね」と安藤がはしゃぎ声で言った。「いまね、唐沢さんがてんで変なこと言うんだもん。笑っちゃうよ」

「それをおれにも聞かせろよ」

「ぼくにさ、二瓶看守を誘惑してみろってすすめるんだ。あいつはホモに決ってるから、あしたの運動の時抱きついてみるだって。そんなことしたら張り倒されちゃうよねえ」

「そうでもないさ」と唐沢が言った。「あいつは満更でもないから、抱きつかれてもすぐ張り倒すことはしないよ。おれは五秒は凝つとしてると思うね。なあ為、賭けるか。牛罐三個」

「ほいほい、賭けてもいいわ。二瓶はあれで案外職務に忠実だからあつという間に張り倒されるほうにおれは賭ける」

安藤が笑いながら言った。

「ぼく、やだよ、そんな博奕^{ばくち}。どっちみちぼくは張り倒されるんじゃないの。そのうえ、懲罰にかけられるんじゃないや」

「しかし、そのおかげで、お迎えの順番は早くなるよ。きみは早く死にたいんだらう」と唐沢。

「それはそうだけださ」

「こんな世の中に飽き飽きたんだらう」

「それはそうだけださ、張り倒されるのは痛いし、懲罰は辛いしねえ。文書閲読禁止はなんともないけどさ、軽扉禁はまいるもの。十日も二十日も誰とも話をせずに坐ってるなんてまっぴらだな」

「どうせ死ぬんだから、そのくらいの我慢はしたらどうだ」

「そうはいかないよ。ぼくはバツタンコだけが好きなんだから。あれは、あつという間に死ねるでしよう。痛くなくて死ねるの、すてきじゃない。痛なんかでひいひい言ってる死ぬより、よっぽどましだもん」

「こいつめ」唐沢が失笑した。すると、安藤は一層嬉しげに笑った。他家雄は近木医官が安藤から聞いたという奇怪な情報を思い出した——砂田が睡眠薬自殺をすると他家雄がゼロ番囚仲間に言いふらしたという。

「おい、坊っちゃん」と他家雄は極めつけるように言った。

「砂田が睡眠薬で自殺をはかるなんて誰からきいた」

「なにさ、それ」

「お前がさる人物に話したことさ」

「そんなこと話したことなんかないよ」

「いまのは何の事なの」と唐沢が尋ねた。

「いいんだよ、大したことじゃない」他家雄はごまかそうとした。

「待て、妙チクリンなことをぬかすじゃねえか」と河野が敏感に食いついてきた。「ええ、楠本よ、おせんころがしのこと誰から聞いた。さる人物とは誰のことだ」

「誰でもないよ」と打消しながら他家雄はいらぬ事を口走ったと後悔した。果して河野はなおも粘っこい口調でからんできた。

「見当はつくけどな。そいつは近木の若僧よ。あいつは、きょう夕方、坊っちゃんのところから、お前のところへと、巡って来た。ということは、坊っちゃんの喋ったことを、お前に伝えた、可能性は、大きいわけだ。こいつは、糺明しないといかん。どうだ、若僧が言っただろう」

「そうだよ」他家雄は仕方なく白状した。

「それしろ」河野は勝ち誇った。「あの若僧は、何か企んでやがるんだよ。それが何かが重大問題だ。なあ、坊っちゃん、お前、なんで、砂田が自殺するなんて、言っただ」

「言わないよ、そんなこと」

「言っただよ。そういうデタラメは、お前の言いそうな、ことなんだ」

「チェツ、こまっちゃうなあ。ぼく本当に何も言わないもん。近木先生がデタラメなんだよ。あの先生ったら区長さんと二人で、ぼくが手淫オナニしている真っ最中にいきなり入ってきて、いやらしいんだから」

「藤井区長が来たのか」河野は急ぎ込んだ。白髪を角のうちに逆立てている様子が目に見える。「何しに来やがったんだ」

「そんなこと知らないよ。区長さんなんてしょっちゅう来るもん。いちいち、何しに来たかなんて考えるの面倒くさいや」

「それでもさ」河野は幾分言葉をやわらげ子供をあやすような調子に変った。「近木先生と一緒に来たんだったら、何か、二人に共通した、用事があったわけだろう」

「ぼくのこと気遣いだと思ったんじゃない。おかしい野郎でしょうって、しきりと近木先生に言っただもん」

「ありうることだな。お前は、前から、区長の要注意人物だったからな。お前みてえに、しょっちゅう、へらへら笑ってやがると、ヤツとしちゃ、掴みどころがなくて、気味がわるいんだよな。同じ確定者でも、長助みてえに、めそ

めそしてやがんのなら、ヤツは、平気なんだ」

「ハハハ、ぼくは知能が低いんだって。死がこわくないのは精神薄弱のためなんだって、近木先生が言ってた」

「お前が精神薄弱だなんて、ばかばかしい。ふむ、あの若僧医者に、気違いの診断なんか、できっこねえんだよ。ここじゃ、おれたちみんなを気違いにしたがっててよ、二瓶のヤツも、何かっていうと、おれを精神科医にみせるぞっておどかしやがったがよ、精神科医が、あの若僧じゃどうしようもねえ」

「そうそう、それから、あんたのことを言ってた」

「へえ、若僧がかい」河野は気がなさそうに言った。

「区長さんがだよ」

「なんだと」河野は急に真剣な口調に変わった。「区長がなんだって言いやがるんだ」

「きょうあんたの救援のためにデモ隊が来るって」

「まさか」河野は再び気がなさそうな調子に戻った。「この用心深い拘置所がそんな重要な機密を、お前に洩らすわけはねえよ。なんだな、夕方のデモを聞いてから、お前が思いついた嘘だろう」

南側の表門からもっとも遠い北側の、この四舎二階には、表門あたりの騒ぎはほとんど聞えてこない。最近頻繁に来襲する学生デモも、ここでは、繁華街の騒音にまぎれて気

にならぬ程度である。たしかに、きょうの夕方近く、デモ隊らしい拡声器の音が伝わってきたが、言っている内容までは聞き取れなかった。

「河野、ちょっと待てよ」と唐沢が割って入った。「で、安藤君、いまの話だが、河野のためにデモ隊が来るって確かに藤井区長が言ったのかい」

「ああ、言ったよ」

「それは何時頃だった」

「わからないよ、時計がないんだから」

「でも大まかにはわかる筈だ。午後だったね。たしか夕食の一時間以上前、まだ雪が降っていたとすれば三時すこし過ぎだ。そうだろう」

「そうなるかしら」

「まあそうなる。とすると、区長が救援デモが来るときみに告げたのは、デモの来襲以前ということになる。デモ隊が来たのは四時だからね」

「ハハ、よくわかるんだね、唐沢さんてすごいねえ」

「しかし」河野が言った。「あのデモ隊、本当におれのためだったのかな」

「そうだ」唐沢は諭すように言った。「まさしく、同志たちが、きみのために来てくれたのだ。これから何回か波状攻撃をかける、第一波だが」

「そうだとしたら嬉しいんだが……」

「予言しよう。明日の新聞の社会面は墨で真っ黒に塗りつぶされ判読不能だから。つまりデモ隊の記事が載っている証拠だ。実は、それがこっちの思う壺でね、その新聞をネタに新しい闘争を開始する。わかるか」

「ちょっと、見当がつかないな……」河野は口籠った。

「損害賠償請求の法廷闘争を組むんだ。まず、デモの報道を在監者に読ませなかったということは憲法二十一条の『国民としての知る権利』を侵害された事実だ。さらに、そもそも拘留所には記事削除権限がないのだから、右行為は違法だ。しかも、きみは死刑確定者ではあるが不当な差別裁判について世間に見せしめられ、したがって刑事被告人に相応する自己防衛の権利をもつべきであり、自己の裁判に重大な関連のある新聞記事を読めなかったため裁判における自己防衛の権利を侵害されたことになる。以上の理由によりこうむった精神的刑事訴訟法的苦痛を慰済するものとして、金三十万円の損害賠償を請求する。これが新たな法廷闘争の骨格だ」

「なるほど、なるほど」河野は熱くなった。「こいつは面白いや。けどさ、そんな戦術をいまのうち公開しちゃまって、敵に知られやしないかな。たとえば用心して敵が新聞記事を抹殺しない事態となると……」

「なかに、その場合は、別な戦術を考えればいい。同志たちは、きょう、きみに面会をもとめたに違いないが、拘留所側が不許可にした。この事実を衝いて訴えてもいい。自己の権利を守るため、あらゆる機会を利用して法廷に持ちこむ。権力と闘うため権力を利用すること、これが相手の力を利用する日本の柔道的法廷闘争の原理だ」

「ああ」河野は長嘆息した。「そうなんだな。もっと早く、おれが、この原理を、知ってたならな。二瓶の野郎を、告訴してやったとこだ。ヤツの権利侵害について、事実は山ほどあったんだ。房内筆記制限なんか、いい口実だった。一冊五十円のノートの使用を禁止し、一冊八十円の便箋ならいいとか、房内でノートをとるのは、学生だけだと、ぬかし、あの権利侵害について詳細な記録をとり、それを証拠に、法廷闘争に持ちこむべきだった。いまから思えば、ノートの不許可と、筆記制限とは、おれが記録という証拠を残さぬための、ヤツの巧妙な戦術だった。事柄の本質を見抜けなかったからこそ、おれは二瓶の毘にはまったわけだ」

「その通りだ」唐沢は女のように柔かな小声で言った。

「しかし、過去の非を反省するのは未来をよりよく生きるためであることを忘れるな。反省しすぎて未来の希望まで台無しにするのは無意味なことだ」

「わかってるよ」

「はい、河野二等兵、わるくありません」と為次郎が言った。「くそつための為野郎」と習慣で河野はすぐ口走ったがいつものようにどやすことをせず、為次郎には聞えぬほどに声を抑えて唐沢に言った。「用心したほうがいいよ。あいつはスパイだから。あいつに『空気を入れられ』て、何人もの犠牲者が出てる」

「ありうることだ」唐沢も声をひそめた。

「犠牲者は、みんな短期間で処刑されやがった。ところが、あいつは、確定後八年間も生きてる、最長不倒記録保持者だ。おれたちの話も、あいつに聞かれたら、官には筒抜けだと覚悟しなくちゃ」

「なるほどね」

「よろしい、河野二等兵、着眼がよろしい。唐沢少佐は今後充分に為野郎に注意し、犠牲者とならぬよう、気をつけるであろう」と為次郎が言った。

安藤がけたたましく笑いだした。真つ白な美しい顔に不釣合な笑が刻みこまれているのを想像すると他家雄はやりきれぬ思いがした。この安藤とは運動時間には一緒にいるが、いままで、ずっと向い側の房にいたため不断はこの笑声を聞かなかった。けさは、教育課長の足音から、てっきりこの坊っちゃんにお迎えが来たと信じて、彼の二十一年間の生涯を回想してみた。神田のバナナ御商の子として生れ、

富士見町のミッシェン・スクールに入ったものの成績不良で、群馬の錬成道場に行かされたこと、そこで肺結核にかかり療養所にいるうち、脱走し上京中に事件をおこしたこと。ハハハとハの発音を明確にして安藤は笑う。ハハハ、ははは、刃齒寒。この世はハハハ、殺人もハハハ、死刑もハハハ。相変らずみんな歌謡曲を、聞いている。野球がある時は囚人のまず全員が野球を、聞く。話しながら相手の姿は見えず声だけを、聞いている。看守の足音を都会のざわめきを水道の音を、聞く。聞くことで成立している世界だ。見ることは稀だ。確定者には月一回映画、月二回テレビを見せてくれる。見るのではなく、見せていただくのだ。見ることは官の恩恵である。聞くことは見ることよりはるかに自由で機会も多い。と言っても聞くことにもむろん制限がある。何もかも自由に聞けるわけではない。ニュースや論説や教養番組やクラシック音楽は聞くことができない。あるとき、ヘンデルのオルガン協奏曲が聞えてきたことがある。方々で失笑がわき、続いてみんながスイッチを切る音が続き、たちまちヘンデルの音楽は縮小された。珍しい音楽に聞き惚れていた他家雄は五分ほどして、ヘンデルが不意に歌謡曲に変ったのがわかりした。ラジオ係の看守が番組操作を間違ったらしい。とにかくここでは、聞くのではなく聞かせていただくのだ。それにしても、聞きたくな

いことまで聞かされるのはやりきれない。見たくなければ目を瞑ればいい。しかし聞きたくなければといって耳を塞ぐわけにはいかぬ。時間は食事、運動、接見、呼出、点検とすべて音によって区切られ、色付けられているからだ。開いた耳より、聞かされる、これが囚人の状態によく相応している。耳は五官のうち最も受動的感官である。

安藤が笑っている。その笑を聞かされている。飛び交う将棋の数字を聞かされている。「5二角」「5四角成」「8六飛」「7八銀」歌謡曲を聞かされている。そのうち片桐の読経を聞かされるだろう。他家雄は窓から離れた。午後眠ったせいか、睡気がふつ切れて、意識が透明な水中を泳いでいるような気がする。九時の正就寝になると滅燈だ（電燈が暗くなる）から、それまでに『あこがれ』の原稿を書いておこう。

他家雄は蒲団をたたみ机をつくった。机上を固定するため大型のカトリック大辞典を重しとして置き、原稿用紙を拡げ万年筆を手にした。被告のとき、房内筆記許可や原稿用紙と万年筆の使用許可をもらうのに大変な苦勞をした。彼が大学出であったため、大学ノートとボールペンの使用は簡単に許可された（この点、河野の言うような差別があるかにある）が、原稿用紙と万年筆となると、裁判と関係がないとか前例がないとか贅沢だとかという理由で中々

許可されなかった。闘い取った原稿用紙の紙ざわりと闘い取った万年筆の力強さを覚えながら、こうして一行を書くことがどんなにまざまざと苦しい過去を呼び覚ますことかと思う。そうだ。房内筆記について書こうか。おそらく書信係の検閲を通りはしないだろう。下手をするとまた所長の呼び出しだ。なにしろ楠本他家雄、『夜想』の著者、獄中文筆家すなわち危険人物の文章だ。『あこがれ』のバックナンバーは危険出版物として所長の机上に網羅されていたではないか。きょうの出来事で何か書くことはないか。朝、安藤にお迎えが来たと思ったこと、運動場で砂田が奇声を発したこと、大田の発狂、墜落の発作、河野や唐沢の革命論、みんな書けないことばかりだ。霞女史がほめてくれた雀や鼠の話のように、何か当り障りのない素材で、しかも獄中を暗示するようなことはないか。

某月某日

持病のメマイがおこって横になった。薬のせいかな睡い。ふと額がこそぶく、目を覚ますと小さな蜘蛛が天井から下って来ている。細い糸が光り、絞首刑の形になっている。縁起でもない。蜘蛛を払い、逃げていくのを潰そうとしてやめた。無益な殺生はやめようと誓ったばかりではないか。と思ひながら額に飛んできた冬蚊をはたき殺していた。

私はKのようにはなれないと思う。

Kは隣房にいる歌人だ。彼は房内に入ってくる生き物の一切を殺さない。Kの詠んだ歌に、おのれの血を吸ひし蚊の重く飛ぶを見つ命尊し房中の冬、というのがある。私には歌のよしあしはわからないが、彼の気持は痛々しいほどに伝わってくる。

生きているものは、たとえおのれの血を吸った蚊でもいとおしい。私はKの歌を読んだあと、しばらく蚊を殺さないで、その精巧な体を見詰めたことがあった。この一匹の小さな生命が私と接触した不思議を思った。けれども私の修養はKに及ばない。痒みには耐えられない。私はやはり蚊を殺すようになった。

しかし蠅は殺さない。羽音はうるさいし、その黒い体を本能的に好かないが、殺す気はしない。たぶん、あの白い中身の食み出た死骸を見るのがいやなのだと思う。なぜなら、蚊なら殺せるのだから。蚊の死骸は小さすぎて憐憫の念をおこさせない。

ゴキブリはどうか。私はこの虫が大嫌いだ。が、蠅と同じ理由で殺すことができない。去年の春、ゴキブリの大量発生があった。夜など群をなして床をほう音が聞えるほどだった。たまりかねて、ノートで叩いたら二匹ほどが潰れた。羽をひろげ、断末魔の痙攣をする虫を見て私はぞっと

した。もう二度と殺す気はない。

私が、ここで許されている唯一の飼育動物である文鳥を飼わない理由もその死をおそれるからだ。以前、私も一羽飼ったことがある。教育課から入れてもらった雛は、私の掌の上で剥き栗をついばみ、よくなれた。ねむるとき、尾を垂れて籠の底につけ、首をいたずらのようにめりこませて胸を気取った風に突き出し、二度ほどアクビするのが可愛い。やがて目蓋が垂れて、クチバシを羽につっこみ丸くなってねるのを見とどけると私も安眠できた。

しかしある朝、とつぜんに雛は死んでいた。横に倒れて、脚もクチバシも紫色になり、目を閉じて冷たく堅く変化していた。それはまさしく変化である。あれほど愛していた生き物ではなく、何か全く別な物に変わり果てていた。私はやはりぞっとした。その物を正視することができなかった。人が死んだあたも同じことがおこる。何ということか、人間の死後の物化をかつて私は自分自身の手で確かめてしまった。その経験から類推して私の軀が死後にこうむる変化を私はほぼ正確に想像することができる。

私は自分の屍体を医学生の実習用に寄付することになっている。寄付の承諾書に署名するとき、担当は本当にいいのかと念を押した。彼の目には幾分のあわれみと尊敬の念が浮んでいたように思う。しかし私は、この行為によって自